

荒川岳遭難報告

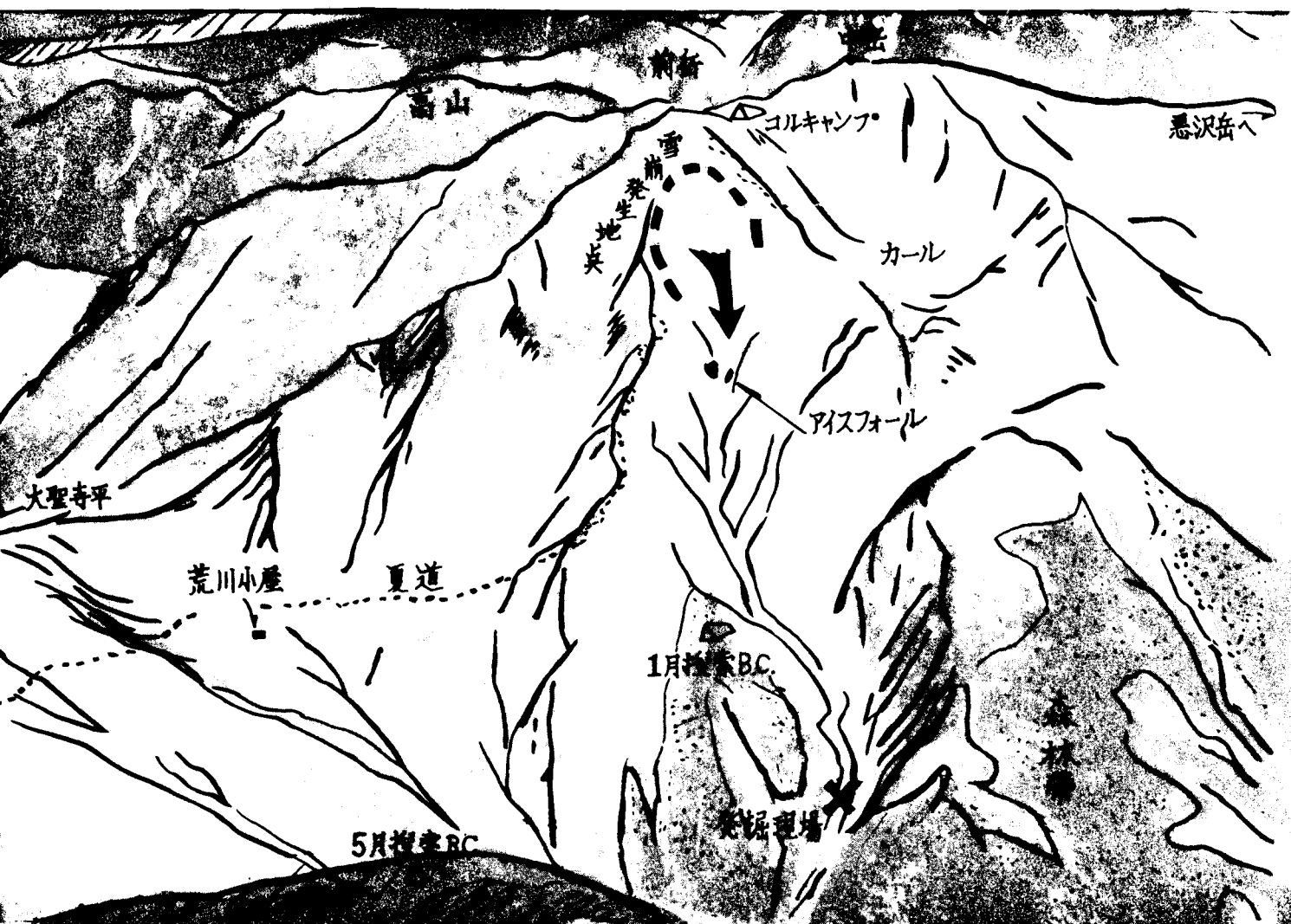
昭和三十九年十二月

昭和山岳会

この報告書をも荒川岳に眠る

我々が五人の仲間にささげらる





ご挨拶

代表 小松崎 栄太郎

当会々員が荒川岳にて雪崩のために遭難してからもう二年たった今、大変遅ればせながら本報告号を発刊いたしますに当り、一言ご挨拶を述べさせていただきます。先づこのような遭難を惹起いたしましたことについて、ご遺族ならびに皆様に大変ご迷惑をお掛けいたしましたことを深くお詫び申し上げますと共に、この捜索に関して賜ったご協力やご厚意についてここに改めて感謝申し上げます。

この報告号の目的は、一つにはこの捜索に関してご協力下された皆様の活動状況を記録として残させていただき、永く我々やご遺族の感謝の意としたいと存じ、二つにはこの遭難の原因を究明するために当時の気象、積雪状況等について、微少ながら我々が集めたデータがございましてこれを纏めて記録として残しておけば、何か皆様にご利用いただけるのではないかと存じ、又遭難がご遺族や社会に対してどのくらいご迷惑をおかけいたすことになるものかということも改めて再認識をいただき、今後遭難予防の進展の一助にもなればと存じ、あえて拙文ではありますが発刊いたしました次第であります。

ご高識の皆様には内容不十分とは存じますが、何卒本趣旨をお汲みとりいただければ幸いと存じます。

本来ならば捜索についてご協力やご便宜をお計り下された、官庁、会社、団体、個人の皆様全部をここにお挙げいたしてお礼を申し述べべきではありますが、誠に勝手とは存じますが、紙面の都合上、官庁、会社、団体のご芳名のみを次頁に挙げさせていただきますのでご了承下さるようお願い申し上げます。なお混乱の折でしたので記載もれの向きもあるかも知れませんがその点あらかじめお詫び申し上げます。又特別な事項について特にご便宜、ご協力をいただきましたご関係のご芳名は関連ある各項目中にご記載させていただきます。

りますのでご了承方お願い申し上げます。

最後に、現在では遭難が単に個人と所属団体、家族だけの問題ではなくって、社会的になっていっていることに思
い致しますとき、我々は今後二度と遭難を繰り返さないよう充分努力して登山活動をお誓い申し上げ
てご挨拶にかえさせていただきます。

ご協力団体一覧表

(順不動)

静岡県警殿	静岡中央署殿	静岡県庁殿	静岡市消防局殿	東電田代第二発電所殿	東電山梨支社殿	杉山組殿
東電甲府サービスマスター殿	東電甲府営業所殿	山梨県警殿	甲府市役所殿	鯉沢警察所殿	飯田警察所殿	
淀橋警察所殿	警察庁殿	大鹿村役場殿	早川町役場殿	井川町役場殿	東海バルブ井川山林事業所殿	
東京営林局殿	甲府営林署殿	駒ヶ根営林署殿	本州製紙内地山林部殿	飯島木材殿	ミズホ産業殿	
長野営林局小渋川事務所殿	長野営林局殿	長野県警殿	東京都庁殿	霞ヶ浦第一ヘリコプター隊殿		
東部総監部航空幕僚殿	東京都教育庁殿	共同通信社殿	同甲府支局殿	朝日新聞社殿	同甲府支局殿	
毎日新聞社殿	同甲府支局殿	読売新聞社殿	同甲府支局殿	サンケイ新聞社殿	同甲府支局殿	東京新聞社殿
NHK殿	同甲府支局殿	フジテレビ殿	NETテレビ殿	日刊スポーツ殿	中日ニュース殿	日本映画新社殿
山梨放送殿	山梨日日殿	山梨時事殿	甲府市教育委員会殿	甲府北東中学殿	松江四中殿	気象庁殿
東電淀橋サービスマスター殿	山と溪谷社殿	四季楽園殿	エニ通信株式会社殿	東京都山岳連盟殿		
同加盟団体殿	山梨県山岳連盟殿	同加盟団体殿	東京営林局山岳会殿	東海バルブ山岳部殿	東京白稜会殿	
雲表倶楽部殿	山岳巡礼倶楽部殿	東京研嶺倶楽部殿	東京汽車会社山岳部殿	雪標山岳会殿	早大岳文会殿	
城北高校山岳部OB会殿	甲府昭和山岳会殿					

目次

昭和三十九年度冬山合宿報告

赤石岳周辺合宿の意味について	金子新之	12
冬山合宿計画について	小松崎栄太郎	14
南ア縦走A班(聖岳と塩見岳)	寺沢正男編	15
〃 B班(大沢岳と聖岳東尾根)	寺沢正男	17
〃 C班(小赤石尾根と荒川三山)	木村紀夫	21
〃 D班(荒川三山と小赤石尾根)	清水貞夫	24
谷川岳萬太郎班	岩崎元郎	26

搜索から発掘まで

第一次搜索活動報告

行動記録

28

先発・桃沢正幸
本隊・樽木孝明
後発・清水貞夫

二軒小屋連絡本部記録

白井清

第一次へり出動について

古尾谷芳太郎

食糧について

秋葉敬子

46 46 42

遺体発掘作業及び状況	樽 木 孝 明	40	二軒小屋荷下げ	関 口 晋	49
------------	---------	----	---------	-------	----

荒川岳遭難才二次捜索に伴う	現地、営林署等への依来並びに打合せ	原 脩	48
---------------	-------------------	-----	----

荒川岳遭難現場偵察行	△偵察の目的及び結果▽	年 森 靖	50
------------	-------------	-------	----

△行動記録▽	沢 田 章／岩崎元郎	51
--------	------------	----

チェンソーによる雪崩事故現場発掘作業について	高 橋 正 章	74
------------------------	---------	----

第二次捜索活動報告

捜索隊の編成について	小松崎 栄太郎	54	捜索活動支援について	速 藤 登	68
------------	---------	----	------------	-------	----

行動記録	桃 沢 正 幸	56	物資輸送・ヘリ使用について	小松崎 栄太郎	70
------	---------	----	---------------	---------	----

遺体搬出作業について	年 森 靖	63	使用器材について	木 村 紀 夫	71
------------	-------	----	----------	---------	----

搬出作業考	小松崎 栄太郎	64	薬品係後記	高 野 光 子	78
-------	---------	----	-------	---------	----

搬出作業記録	白 井 清	65	捜索食糧の計画と反省	吉 田 克 己	80
--------	-------	----	------------	---------	----

都出達への出動要請	古尾谷 芳太郎	67	通信を受持つて	浦 野 稔 雄	83
-----------	---------	----	---------	---------	----

遭難対策東京本部日誌		86
------------	--	----

本遭難の考察と反省	小松崎 栄太郎	96
-----------	---------	----

昭和三九年度冬山合宿報告

(遭 難 に 至 る 経 過)

赤石岳周辺合宿

の意味について

故 金 子 新 之

今年度の冬山合宿は赤石岳周辺の諸ルートを数パートに別れて、縦走形式でトレースすることと決定したがこの合宿の意味について、企画委員として、又私個人としての考えをここに記し、この合宿について会員諸兄の理解を深めてもらいたいと思う。

昭和山岳会創立以来、二十数年間の会の歩みは必ずしも平坦なものではなく、太平洋戦争を始めとする大きな壁にぶつかっては、その困難を忍び、更にそれを突き破

って今日まで前進してきた。

現在昭和は再び新しい壁に直面していると思う。その一つは会の人間構成である。この春企画部が大巾に交代したが、旧企画部員と新企画部員との間には数年の断層があり、更に現企画部員と次期企画部員たるべき三、四年会員との間にも数年の断層がある。そしてこの断層が当然なせるべき指導層の交代を遅らせたり、上下会員間の意志の疎通をさまたげたりして、会の運営の大きなガンになっている。

次に日本の登山界全体が直面している問題ではあるが国内の困難な諸ルートの積雪期登攀もほとんど完成された現在、新しく進むべき方向を見失い、とまどっていることである。この解決の為に連続登攀とか、困難な登攀ルートでの極地法の展開等、新しい試みがなされたが、

それで完全に解決されたとは思えず、計画性のない思いつきによる山行がそのつど企画されて、会員の山行意欲を除々に減退させている。

又前記の登山の方向についてのとまどいと関連するが交通機関の発達が山岳地帯の都会化を促進して、多くの山々が本来の静けさを失って来ていることである。そのため登山者の多くは、単なる観光客になりきるか、又は山々を単なる体育館とみなすことによってあきらめようとしている。そして登山はその本来の姿が見失なわれてゆがめられようとしている。岳界の一部ではその解決策として、未知の中級山岳のルート開拓に力をそそいだりしているし、昭和でも昨年の黒部合宿はそういう意味のものであったが、会員全体からの盛り上りに欠けたきらいがあった。

以上書いたことは“壁”というにはあたらなほいほど漠然としたものかも知れないが、新企画部員としての私が生来の山行計画を立てるに当って当然考慮し、突破しなければならぬ何物かであると思う。

今度の冬山合宿を赤石岳周辺へもっていったのは、私達の身近にある山々の中で最も山らしい山だからである。そのスケールの大きさと、奥深さとがその登山をきわめ

て困難なものとするであろうし、その困難を克服して行く過程で、登山の本来の姿についてとか、今後の登山の方向についての何かしら尊重な示唆を私達に与えてくれるような気がする。

太平洋戦争終了直後、昭和の先輩は夏に諸々の困難な条件を克服して、一ヶ月余りの日時を費し南ア金山リレ―縦走を行い、それによって昭和再建の方向を見い出したと聞いている。

私達はこの辺でもう一度自分を、そして昭和を、山をよく見つめて明日へのビジョンを追求して行きたいと思う。赤石周辺での合宿がそのよい契機となるよう願う。

縦走形式は言うまでもなく、未来の昭和を背負って立つ強力な中堅を育成するのに、最適な方法と思うからである。

なお昭和では、数年前まで地域研究として、赤石周辺の沢のトレースを精力的に行って来ましたが、今度の冬山合宿とその偵察としての夏山合宿を赤石周辺で行うことは、先輩の残した尊い仕事に、新たなページを加えるという意義もあると思います。

三十九年度冬山合宿計画について

小 松 崎 栄 太 郎

本年度の冬山合宿計画は前項に述べられた目的に従って、参加メンバーと参加日数を考慮して二方面に大きく分けられた。一つは赤石岳周辺に入る長日数組と、もう一つは短日数のため谷川・萬太郎山を北面より入る組とである。前者の組も又日数、技術、経験等を考えて四ルート、四パーティに分散した。これらのパーティの行動予定とメンバーリストは別表の通りであり、これは計画書と共に十二月初めに、静岡、山梨、長野、群馬、新潟の各県警本部及び地元、役場、小屋等に提出してある。

今A班だけをみてわかる通り、日数には充分余裕があり、又非常の際の下山ルートについても充分検討されており、この計画自体についてはなんら問題になる点はないと委員会で決論しています。又雪崩の危険性についても検討は加えられており、一番問題になる個所として荒川小屋より荒川岳までのトラバース・ルート（夏道）が指摘された。一般に冬期はトラバース・ルートは通らずに荒川小屋裏より直接リッジ通し登るのが普通である

が、勿論雪の状態によつてはトラバース・ルートも登られている。いずれのルートを通るかはその地でリーダーの判断にまかせることと委員会で決論した。又この他にも荒川岳より高山裏露营地への下り、百軒平より赤石岳への登り、百軒洞小屋から稜線に出るまで等の雪崩の危険性、兎岳と聖岳間のコルの通過の危険性、奥聖岳より東尾根への下降ルートの初めの附近の危険性、大聖寺平での吹雪時の迷いやすさ、赤石岳より小赤石尾根へのルートは夏道を通らず、直接小赤石岳まで行き、そこから稜線通しに行くこと等々、委員会で確認し、各パーティに周知徹底させていた。

さてA班のメンバー構成についてであるが、森田格君は最初はこのパーティに入っていなかったたので、そのため普通の隊員ということでこのパーティに参加しました。しかし、リーダーに対してはアドバイスをする役目を持つことを委員会で確認しており、パーティ全員も承知していました。

南アルプス縦走A班

西沢渡→聖岳→赤石岳
→荒川岳→塩見岳→二軒小屋

期 日 昭和三十九年二月二十六日

昭和四〇年一月七日

パーティ L金子新之 SL天元和子 古田 忠

釣巻慎一郎 森田 格 (オブザーバー)

二月二十六日

東京発一二・二〇急行「なにかわ」で出発。豊橋で乗換え平岡着。平岡発七・三〇頃のバスで梨元へ向う。

格さんのお骨折りで事業所にとめてもらう。

二月二十七日

軌道沿いに歩く。途中軌道車が上がってきたので、荷を北又渡まで運んでもらう。朝からの小雨がだんだんひどくなり、西沢渡に着くころは本降りとなる。

事業所の空いている小屋をみつけてもぐりこむ。冬山でのこんな雨ははじめて。

タイム 梨元八・〇五北又渡一〇・一五→三〇西沢渡

一三・三〇

二月二十八日

聖平の小屋を目ざして小雨の中を出発。だんだんと高度をますますと、雨はみぞれに変わり、ついに雪となる。

下部は夏と変らないが、上部はひざぐらいまでのラッセルとなる。

ぬれ雪のため昨日と同じくびしょぬれ。稜線に出て不用の荷をデポし、聖平の小屋へ向う。小屋には先客がいたが、ストーブが暖かくわれわれを迎えてくれた。

タイム 西沢渡六・四五薊畑一二・三五聖平小屋一二

・五〇 (以上、金子のノートより)

二月二十九日 曇りのち晴

起床は四時、五時半に小屋を出ている。昨日デポした薊畑には六時着、二五分後に出発している。聖岳の登りは意外に早く三時間余で頂上に達している。ラッセルの有無は判然としないが、悪天候の後なので多少はあったであろう。それなのに早かったのは上部は雪がしまっていたと思われる。又天気もスッキリしてなかったと考えられる。(写真なし)

頂上にはB班への次のような連絡表を置いた。

「A班よりB班へ

予定通り二月二十九日九時三〇分ここを通過、全員

元氣、B班の健斗を祈る。」

聖岳の下降中急速に天氣は良くなったと見え、聖岳、兎岳、赤石岳、大沢岳方面の写真がある。当初の予定では兎岳との最底コルに泊るはずだったが、天氣が良くなったので先へ進んだのである。聖岳の下降はかなり緊張したと思われる。コルまでに約二時間を費している。調子のでてきた彼等にとって兎岳の登りは軽かったようだ。更に小兎を越え、中盛丸山とのコル辺りの小広い台地に天幕を張っている。

タイム 聖平小屋五・三〇デボ地六・〇〇〜六・二五

聖岳九・三〇〜四〇最底コル一・一〇兎岳

一二・二五兎岳のコル一二・三五〜四五小兎

と中盛丸山のコル一三・五五

(タイムは古田の手帳より)

一二月三〇日 快晴

この日は誰の手帳にもコースタイムが書かれてないが金子の写真が彼等の行動を報じてくれる。

幕営地より夜明けと共に空身でラッセルに出たようだ。朝から良い天氣で明るい写真ばかりである。大沢岳のコルより彼等は百間洞小屋經由のルートを探ったらしく、赤石沢上流附近の森林帯の中で記念写真を撮っている。

大沢岳から百間平の最低コルへ突上がる沢をラッセルしつつ登る姿も写真に残っている。大沢岳の特徴ある姿が多く撮されているところから、この最低コルでは永く休んだとみえる。百間平まで一気に登り、休憩の後赤石岳へと登る。(赤石頂上附近では写真少い)

大聖寺平も越えて、荒川小屋附近かと思われる、稜線はアーペントロートに色づき、谷は暗くなり始めた頃の写真がこの日の終りの写真であった。

この日のコースタイムが見られないのは大いに疑問であるが、これは彼等の行動行程が冬としては非常に長くしかもいかに一日中快晴であったとしても、写真を撮った休憩はどうしても必要な休憩だったのだろう。

荒川小屋へも夕刻入ったと思われる。厳しい一日の行動に、手帳の整理すら何か面倒な疲労感を感じていたことと想像される。

一二月三十一日 快晴

朝九時、前岳のコルまで全員でボッカに出発する。予想以上に行程がのびたので、この日は午後から休養するつもりだったのである。コルに食糧とザイルをデポし快晴にのんびり休んでから下山開始、そして間もなく雪崩に遭遇したものである。

◀補記▶

二八日までの記録はリーダー金子が、その日その日の夜にでも書いたものであろう（原文のまま載せた）。

二九日、三〇日の記録も書かれて良いと思われたが、二九日は入山以来初めての天幕で、ノートを開くのがつい面倒になったのであろう。三〇日については、好天に恵まれ、予想以上にピッチが上り荒川小屋へ一気に入った。従って又ノートを開くのがおろそかになったものと思われる。

小松崎代表宛、梨元より森田、金子の兩人から次のような連絡があった。

“二七日、小雨。それでも全員元気です。今日は西沢渡までの行程をのんびり行きます。地元の人のお話だと雪は昨年よりちよっぴり多いとか……森田”

“今度の冬山は小松崎さんにはいろいろと御心配をかけたが、どうやら実施の所までこぎつけ第一陣として私達五人（金子、森田、天元、古田、釣巻）はこれから西沢渡へ向います。全員元気で張切っていますので御安心下さい。では良い新年を迎えて下さい。”
金子 “なにか運命的に感じる便りであった。
（寺沢正男・記）

南アルプス縦走B班

大沢渡→大沢岳→聖岳
→聖岳東尾根→二軒小屋

期 日 昭和三九年一月三十一日

→昭和四〇年一月五日

パーティ L 寺沢正男 SL 平畑克己 金子 隆

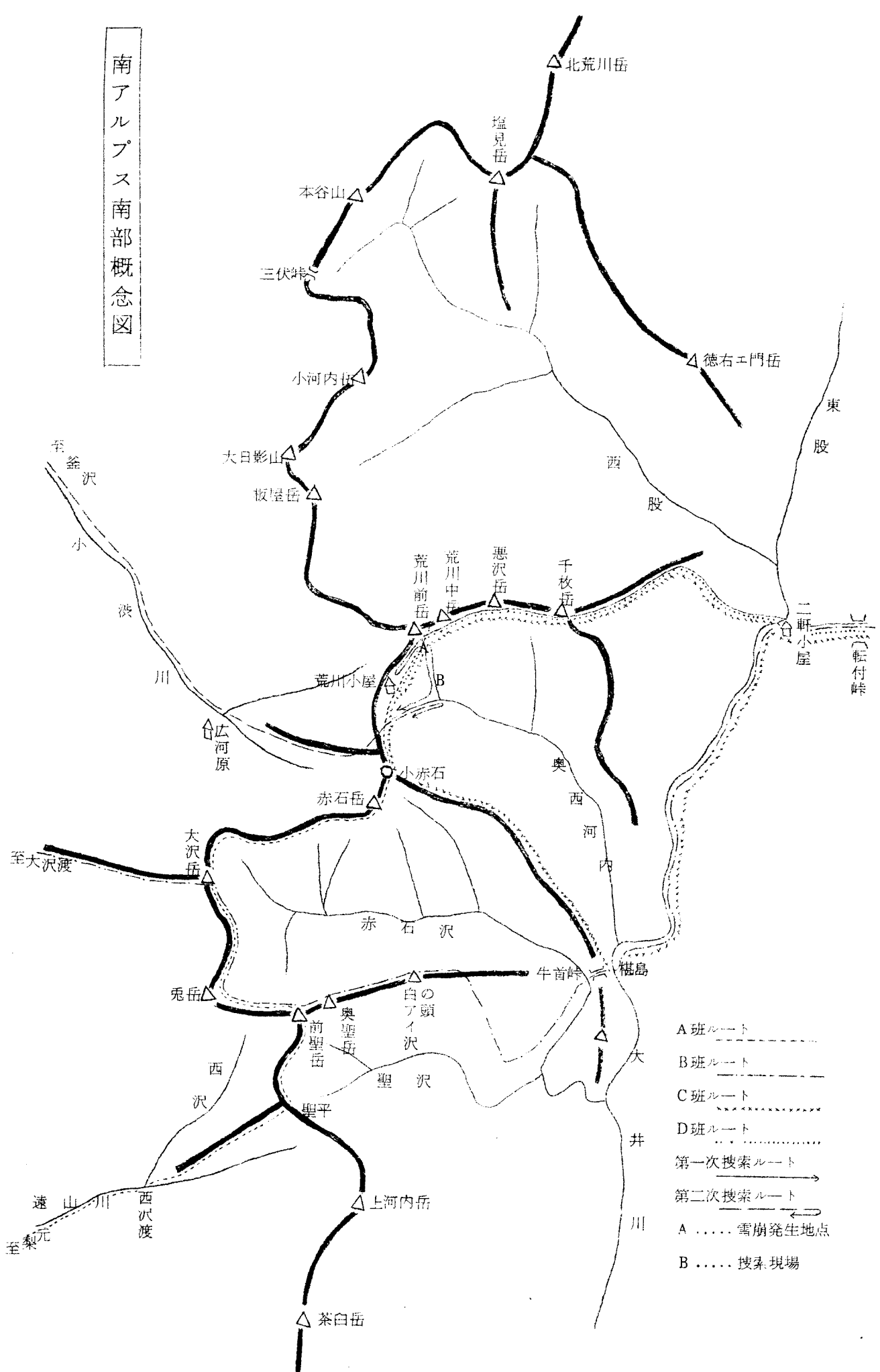
高橋則夫 豊田武彦

一二月三十一日 快晴

未明の豊橋駅着。飯田線の待合すでにいっぱい行列。帰省する人達で楽しそうである。我々五名の山姿は昨夜の東京駅、東海道線、そしてここでも異色の存在だ。混み合う車内でウトウトする間に平岡駅着。バスにすばやく乗込み座席を確保。周りを見ても登山者は意外に少く二パーティ七人程である。途中面倒な乗換えがあり危うく一台乗りはぐる所だったが「増発せよ」と騒いだら車を出し、楽々と座り本谷口、梨元に着く。森林軌道の鉄橋を渡り遅い朝食をとる。

遠山川を遡行する、と言うには大げさだが、とにかく流れの上流に向って坦々とした歩行が始まる。軌道が光

南アルプス南部概念図



金子新之君遺稿 1

リーダーシップとメンバーシップについて

—— 新人諸君に考えてもらいたいこと ——

夏山新人合宿としての南アの縦走は、悪天候等により計画通りにはできなかったが一応無事に終了した。リーダーとして未熟な私の下に、炎天下に、そして冷雨の中黙々と頑張ってくれた新人諸君に、ここで再び『御苦労様でした』とお礼をいいたい。

ところで、この合宿をふりかえてみると、お世辞にも立派な出来だったとは云えなかった。それは予定していた仙丈岳や駒ヶ岳へ登れなかったためにはない。たとえ塩見岳から引返したとしても立派な合宿はありうるのである。

この合宿にあらわれた最大の欠陥は、リーダーシップが円滑に遂行されなかったことである。

リーダーシップといい、メンバーシップといい、それはそれぞれに個有な人格をもった完全に対等な人間どう

しが二人以上集まって一つのパーティを組み、安全で楽しい登山を行う上で必要な人間関係の問題であるから、誰れが正しく、誰れが誤っていると簡単にいえるような単純なものではない。そこにはメンバー各人の技術や山歴、登山に対する考え方、年令や生活環境等、さらに人間としてごく自然な感情や欠点等が複雑にからみあってくる。だからこれはメンバー全員が考えなければならぬ問題であるが、特に新人諸君はこの問題について大きな考え違いをしているか、もしくは深く考えたことがなかったのではないかと思われるので、ここでもう一度考えていただきたいと思う。

「リーダーシップについて」

二人以上の人間がパーティを組んで登山する場合、そ

の山行の責任者として、又その責任を遂行するに必要な権限を有する者として、リーダーを定めることは登山の鉄則である。これは登山を安全で楽しいものとするのに絶対必要な処置であり、他のメンバーはリーダーには無条件で従わねばならない。リーダーはその山行の絶対者なのである。

ここで誤ってならないのは、リーダーは絶対的な能力を有するが故に絶対者なのではなく、絶対性をその任務の性格上、要求されるが故に絶対者なのだということがある。

絶対的な能力を有するリーダーが望ましいことは当然であるが、ありえないことである。それ故にリーダーとなる人は、リーダーに要求される絶対性を発揮できるように努力、研究をしなければならないと同時に他のメンバーもそれに協力しなければならない。例えばリーダーがバテてしまえばその絶対性は発揮できなくなる。したがってリーダーとなる人は自分の体力をつねに鍛えなければならぬし、又他のメンバーはリーダーの体力的負担を軽くしてやらねばならないのである。

結局完全なリーダーシップはパーティ全体の協力がなければありえないのである。

この合宿でリーダーの命令に従わず、みずからリーダーの絶対性を否定したり、リーダーに対する不満を公然と表明して、その絶対性をゆるがしたりしたことはなかったろうか。リーダーの判断や命令の正否とは別に、そのようなリーダーに対する態度は批判され反省されなければならない。

「メンバーシップについて」

一口にいって、パーティの各人が互に協力しあい、助けあって一つの山行を仲良く、楽しく終えることができる、そのメンバーシップは満点である。ところで先きのべたように、メンバー各間のいろいろな差異が、長期間の山行では精神的な軋轢に発展して、おもしろくない問題をおこしがちである。

したがって、パーティを組んで登山する場合は、パーティの各人に協調性と寛容を基調とした仲間意識が要求される。

私達は互に欠点が多いのである。他の人の欠点を互につつまわすのでなく、それを仲間全体の問題としてとらえ、互に補いあって、改め、たかめていかねばならないし、体力の強いものは、弱いものをその弱さゆえに非

金子新之君遺稿 2

難することなく、その弱さを補ってやり、弱いものは自分の体力の強化を計ると共に、何か他の面で、その好意に応えるというようにして、その山行を楽しく、気持のよいものにしていかなければならない。

この合宿で自分の欠点を棚上げして、他の人の欠点にはきびしすぎたり、又人の好意にあまえ、たよりすぎたりして、人に迷惑をかけたことはなかったろうか。

パーティを組んで登山する以上、そのパーティ内の円満な人間関係の確立は何よりも大切なことであり、これなくしてはいかに個々のメンバーが優秀な能力の持主でも、その能力の半分も発揮しえないし、下手すれば遭難ものである。

円満な人間関係としてのリーダーシップやメンバーシップはリーダーや他のメンバーのためにあるのではなく結局は自分のためにあるのだということを知るべきである。

今年度の新人は概してその能力は優秀である。だがそれに慢心せず、謙虚にこの合宿のことを反省し、各自の欠点をあらためて、きたるべき冬山合宿には再び大いにかんばってくれることを期待する。

剣岳北方稜線縦走を終えて

昭和三五年三月六日〜四月四日 金子新之 岩田克夫
私達が昭和に人会して以来三年間、積雪期の鹿島槍又穂高の稜線を秀れた諸先輩に導びかれて歩き、多くのものを学び、貴重な体験を積んで来た。

ここで私達が諸先輩から学んだものを踏み台として諸先輩の手を離れてさらに一段と飛躍するために、又私達に続く多くの後輩にとって諸先輩がそうであったように私達も良きリーダー、良き指導者となるために積雪期登山の基礎的な技術を総合的に強化、発展できるように大規模な縦走をやってみようと考えた。

コースとしては軟雪、硬雪、雪稜、岩稜、ナイフリッジに広大な雪原とあらゆる変化をもち、技術的にも高度なものが要求される北アルプスが第一にあげられた。

当会においては数年前創立二十周年記念行事として積雪期北アルプス白馬岳から槍ヶ岳までの縦走がなされ、

又槍、穂高周辺の稜線は、数次の冬山合宿においてほとんど歩きつくされていたが、立山連峰となるとわずかに残雪期に別山屋根から剣岳が登られただけにとどまっていた。

ために昭和にとってこの空白を埋めようと剣岳から槍ヶ岳間の縦走ときめ、記録的な新鮮さを加える意味で剣岳へのルートとして、宇奈月から毛勝三山を経て剣へ至る剣岳北方稜線をとる事とした。そしてこの縦走を宇奈月、上高地間の縦走と銘うったが、あわよくば槍から穂高への稜線へも足を伸そうという虫の良い下心があった。

期日は三月から四月にかけての三十五日間とした。

従来この種の縦走は事前に途中の山小屋等への荷上げを行ったり、いくつかのサポーターパーティーを使ったり、途中から荷上げを行っていた。

だが私達の場合、時間的な余裕、会の動向等から考えてこれらの安易な方法を排し、縦走に必要な食糧、器材を全て出発点の宇奈月から二人だけで運び上げるという方法をとった。

したがって必然的に荷の軽量化を計らねばならず、一日八〇〇グラムという食糧計画と必要最少限と考えられる器材計画を立て、天幕は持参せず雪洞とツェルト

を併用し、山小屋のある場合は最大限にそれを利用することとした。

行動予定は別山乗越までは荷を二回に分けて運ぶピストン輸送を行ない、二十五日間以内とし、別山乗越で十日以上の余裕日数がなければ槍ヶ岳までは諦めるということとした。

結果は別山乗越へは期限ぎりぎりの二十五日目についてたものの、毛勝山までの稜線でのラッセルに予定の二倍近い日数をとられ苦闘し、別山乗越へ着いた時は体力も気力も最低の状態にあったため一ノ越から富山へ下山してしまった。

しかし、食糧計画、雪洞生活、又ノンサポーターということがこの計画にとって欠陥であったのではなく、二人パーティーというのが致命的であったと考える。

もしもパーティーの人数がもっと多く、ラッセルのピッチを上げ、体力の消耗をより少なくしていたらこの計画の完成は可能であったと考えるのは甘すぎる見方だろうか。

この計画は私達の力がたらず完成できなかったが、当初の目的である積雪期登山の基礎技術の総合的な強化、発展という点に付いては充分達せられたものと思う。

思い出すこと

金子新 一

妻の叔父がよく言ったものである。「この子を変った子だ。一緒に連れて歩くと、いろいろな話をして退屈しない。面白い子だ。」と。昭和十七、八年、新之君が幼稚園に通っていた頃のことである。年令のわりに身体が大きく、近所では年上の子供達と遊んでいた。

中学校の三年一学期までは、能代市で育った。戦争末期から戦後にかけての緊張と混乱の、世をあげて激動の渦の中にあつた時代で、私は食糧確保のためにわずかな土地を開墾していたが、小さな二人の弟達と一緒に彼を連れてリヤカーを引きながら、その畑に出かけたものである。弟達がひどい食べ物に悲鳴をあげて駄々をこねることはあつたが、彼はもう無言で堪えていかねばならぬ事を悟っていたようである。本は手あたり次第に読んだらしい。妻が婦人雑誌に気を配ったりしたこともあり、

私の本もいつの間にか読まれていたりした。多読で速く概して早熟な子だった様に思われる。

秋田高校に入つたのは、昭和二十八年四月。入学式には宣誓を読み、入学試験の成績は平均九十九点だったと聞いている。一番勉強した時代である。高校の三年間はサッカーの選手としてあちこち遠征に歩き、同時にまた学級委員長の務めを果たすなど、スポーツにも勉学にも彼としては悔のない生活だったと言えよう。彼はまた、よく母の手伝いをした。母の心をよく理解していて、男でなければできない仕事は勿論、どんな小さな、どんな詰らぬ事でも頑丈な大男の彼が喜んで手伝いする姿、それは青年には珍らしい頼もしい優しい姿と妻には思われたに違いない。

大学受験のため浪人生活をした希望を持っていた様だが許されず、高校卒業と同時に、昭和三十一年春、東京理大に入学した。彼は育英資金を受ける事を悦ばなかつた。九段の学生会館に入り、私から送られる月七千円の学費で大学生活を続けた。山への興味はこの頃から始つたらしい。

或る年、上京した序でに学生会館を訪ねてみた。ところが居るはずの部屋にも、その近所にも彼は見えなかつた。

た。丁度真夏の東京はまさに灼熱の「るつぽ」だったが待っていた私の前に現われたのは大きなリュックを背負った彼だった。砂を一杯につめて街を走ってきたという。炎天下の登山訓練の姿だったのである。私は街に連れ出して榮養を補給しなければならぬと思って一緒に出るには出たのだが、然し彼はこちらから勧めてみても氷水もビールも飲まなかったし、「うなどん」ならばよかうと言った。その「うなどん」のどんな物かも知っていなかった。この頃の彼は唯、孜孜として山々への憧れに若い情熱を燃やして鍛練を続けていたのである。

彼は上京して以来、この十年間めったに家へは帰らなかった。が夏山、冬山の終りに山の服装のまま急拠帰省して一日か二日泊っては、またあわただしく上京して行くのが常であった。お土産等というものは何もない。持ってくるものといえば、決して山の食糧の残り物だけ。そして妻は繕いや洗濯に忙しく、榮養を摂らせる事に一所懸命だった。昭和三十九年三月末？、彼は例のごとく山の歸りに帰省した。その時は私はこんな事を彼に言った。「東京での生活は忙しく、朝から晩までただ、あくせく働いているだけの様に思われる。はたから見るとまるで身心をいたづらに削り減していると思われな

人生とはそんなものでよいだろうか。遠く連なる山々も近くに聳える森や林も、四季折々に姿をかえて野の花や鳥の鳴りとともに我々の周囲にある。どこか本当に寂かに、ゆっくりと生きる意義を考える所がなくてはいけなのではないか。」と。

昭和四十年一月、彼等一行の遭難を知って、急拠上京した私は、初めて彼の宿所を訪れた。彼の持物を整理する為である。狭い部屋の中にある物。多少の本類と衣類はきもの、寝具類だったが誠に整然たるものであった。それは恰も、今日ある事を期していたものの如く整頓されていた。

彼は幼い頃から教会と御縁があった。中学生の頃も、高校、大学と一貫してルーテル同胞教会に通った。私はいま、彼の霊前に彼の残した聖書を供え、そしてそれを心静かに読みたいと思っている。その聖書のマタイによる福音書第三章に「これは私の愛する子、わたしの心にかなり者である。」とあるのを目にした時、恐れながら在りし日の彼を思い、熱い涙がどつどつ溢れ出るのを、私はどうしようもなかった。

編集後記

報告が三年余も遅れてしまったことは私の責任である
と深く謝している次第です。これがようやく纏ったのは
岩田（一）さん、岩崎君の頑張りのおかげです。勿論、
本報告号が編集員だけの手で出来たものでなく、会員、
ご家族、ご友人の方々のご協力に厚く御礼申し上げる次
第です。

何故こんなに遅れたかという点について一言弁解させ
て頂きますと、先ず私が出来ただけ今回の雪崩の原因を
把握したく、そのための資料収集に時間を要したこと。
その間、四一年一月に妙義山でOか転落重傷、三月に八
ヶ岳でKが滑落、足を骨折するという事故が重なり、そ
の事後処理にエネルギーをとられてしまったこと。そし
て延び延びになっていたところに四二年一月瀬沢で雪崩
のために二名死亡という事故を再び起してしまい、その
処理のため七月までかかってしまったことであります。
今冬の事故からみても雪崩の現象を科学的に把握しな
い限り、今後と同様な遭難を防止することは、登山界が

スピード化している現今では不可能に近いだろう。本文
にも述べておきましたが、雪の特性の測定は当分個人自
らがやるより外なさそうである。雪崩研究に関する文献
リストを載せておきましたので参考にして頂ければ幸い
です。

なお、合同慰霊祭報告の項で故釣巻慎一郎君への弔辞
（国井治氏）および家族を代表しての謝辞（金子新一氏）
が口頭であったので掲載できなかったことをお断りして
おきます。

＊

＊

＊

（小松崎 栄太郎）

遺悼号の刊行が決まり、編集委員が構成され、分担を
定め、「この位の時季までには発行したい」と大まかな
予定を立てて活動が始まってから何とここまで漕ぎつけ
るのに長かったことか。構成メンバーが各々社会に於て
職を持つ身であれば仕事をそろかには出来ず、更に忙
しい時であればそれこそどうにもならない。でも鶴首の
思いで待っていらっしやる方々のことを思うと、こんな
に遅くなってしまったことについてお詫びの言葉がない。
又、私たちは現役で山へも行ってたし、それが遅れた一
因であったかも知れない。私たちは仕事のやりくりをし、
最大限時間を作って山へ出て行ったが、この時間を作る

という情熱をこの号に注いだら、或いはもっと早く出せたのではないかと思ふとますます恐縮する。

私は分相上、御家族の方々、友人の方々に随分無理な辛い思いをさせてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいでした。送られてくる原稿と共にあるお手紙には必ず「書き上げるのに苦勞しました」と書いてありました。長い間遅れてしまったことと併せて、あの頃の無礼をお許し許ければうれしく思います。

(寺沢正男)

＊

＊

＊

おれからもう三年経ってしまった。彼らを思い出しながら、こうして後記のペンを持つに致ったことは感無量である。未整理の原稿が山積みされた。編集方針は既に決定されているとはいふものの、この膨大な原稿はそう簡単に分類できやしない。未提出のままの重要原稿もあった。それでもカタツムリのように私たちは進んだ。そしてとうとう発刊に漕ぎついた。

三度冬がめぐってくる。荒川岳はもう新雪に輝いていることだろう。荒川岳とそこに眠る我らが山仲間は今号の発刊を報告して後記のペンを置きたい。

(岩崎元郎)

荒川岳遭難報告

昭和四十二年十二月一日発行
発行部数 一〇〇〇部

発行者 小松崎 栄太郎
編集者 岩山 一男

小松崎 栄太郎

桃沢 正幸

寺沢 正男

岩崎 元郎

発行所 昭和山岳会

東京都千代田区神田淡路町二ノ四

印刷所 岩峰社

東京都江戸川区平井三ノ一一七八